

不惑の一棟

登録有形文化財 主屋・庭・接道との調和、深軒を通して主屋の変わらない生活と主屋・新屋同士の動線を作り、技術の継承の【伝統の進化】による建築。



東側景観 接道には、主屋の母親の出生地の西三河の幡豆石を使い、城壁にも使われる石詰みの技法の一つ「野面積み」で積む。石積みの上に木と竹で構成した塀を設ける事で木格子と共に景観の調和を図る。



南側景観、格子が持つその直線的でリズム感は、突飛なデザインとは異なり、左官塗り壁と合わせる事で、さらに見る者に染み着きと安心感を与えてくれます。



西側景観、庭より望む。

■ 長い歴史を積み重ね文化財となった主屋を繋ぎ調和する

2022年に国の登録有形文化財に指定された主屋、庭、接道との調和をし、別々の生活スタイルとなる建築主の新屋と主屋、深軒を通し適度な距離を作り新たな生活も作る。

そして、【魅せる構造美と用の美】となる

宮大工による設計・施工から技術の継承をアレンジし独自の技術・技法の

「社寺の業の1つ跳ね梁（桔木）による深軒」

「胴差し 四式雇い臍栓打ち」

「六式格天 縦残対組み」

「独自配合の左官壁」

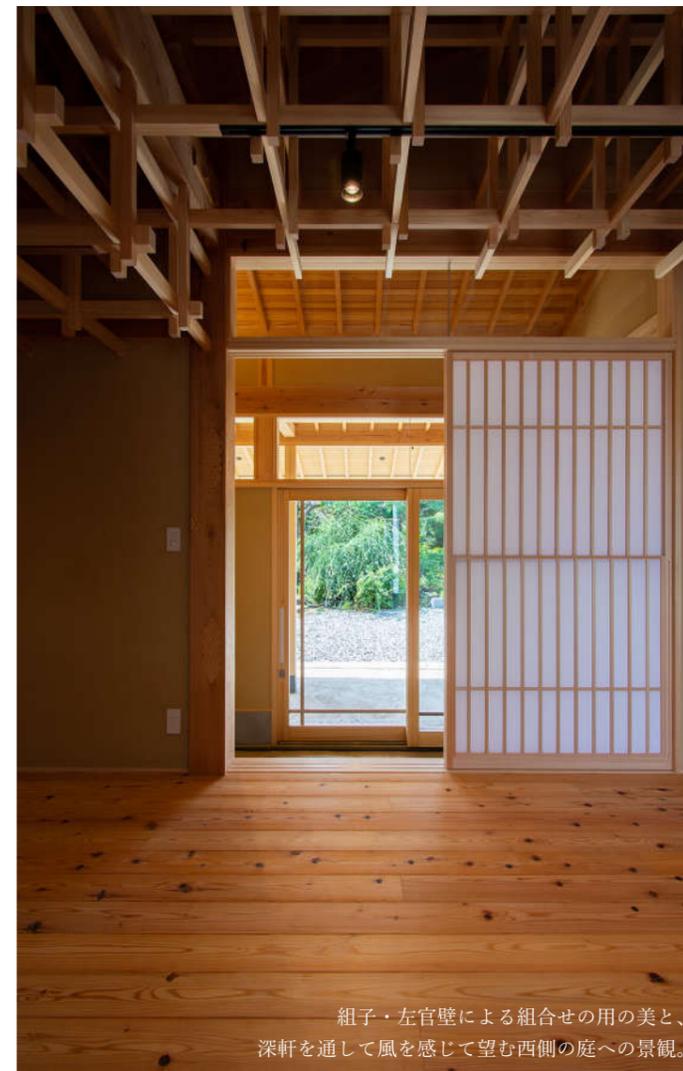
【伝統の進化】を住宅へと変換をする。

様々な仕様と無垢材との調和を五感で感じ精神的な快適さを持ちながら、主屋同様に環境負荷や長期維持への責任にも応答し、素材の経年変化も楽しみながら主屋の時間にも寄り添うこの建物は、主屋、庭、接道との調和が地域の景観に魅力と潤いを与える建築となる。

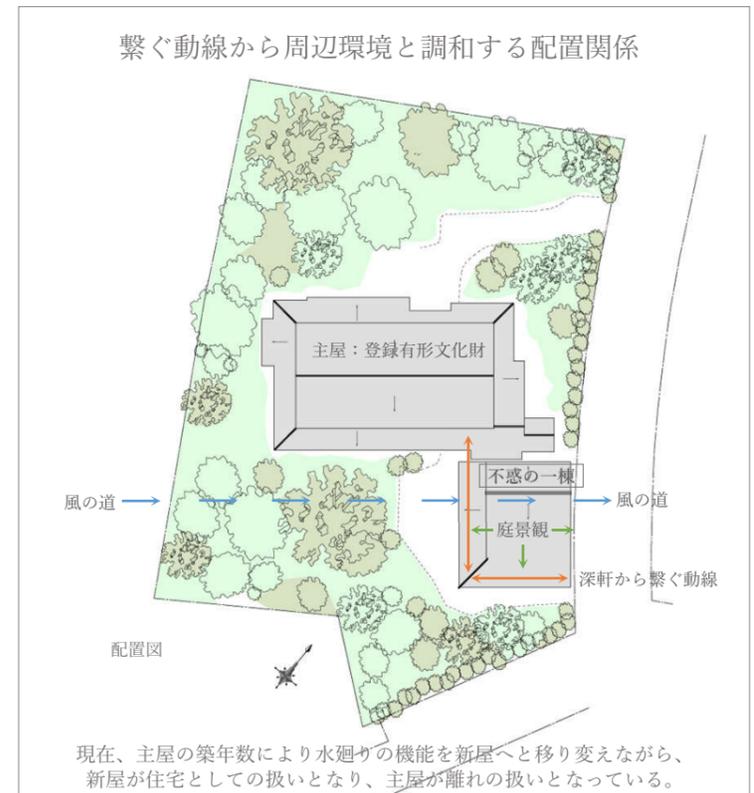
■ 未来へと繋いでゆく

近年の住宅建築様式により伝統技術と技法は減少の一途をり、保持も困難な状況への危惧の念から建築主の賛同と協力により、この建築を通して県内の大学・高等技術専門学校・専門職種へ伝統技術や技法を伝え、後進の育成・各職種への技術の継承などの一端となる。

そして、使用する全ての材木は県産木材の奥三河材を利用し、他の建築資材も出来る限り同郷の資材を使う事で、地域産業と環境にも貢献をする事など、伝統・文化・産業・環境へと繋ぐ建築となる。



組子・左官壁による組合せの用の美と、深軒を通して風を感じて望む西側の庭への景観。



東側庭への景観。



南側庭への景観。



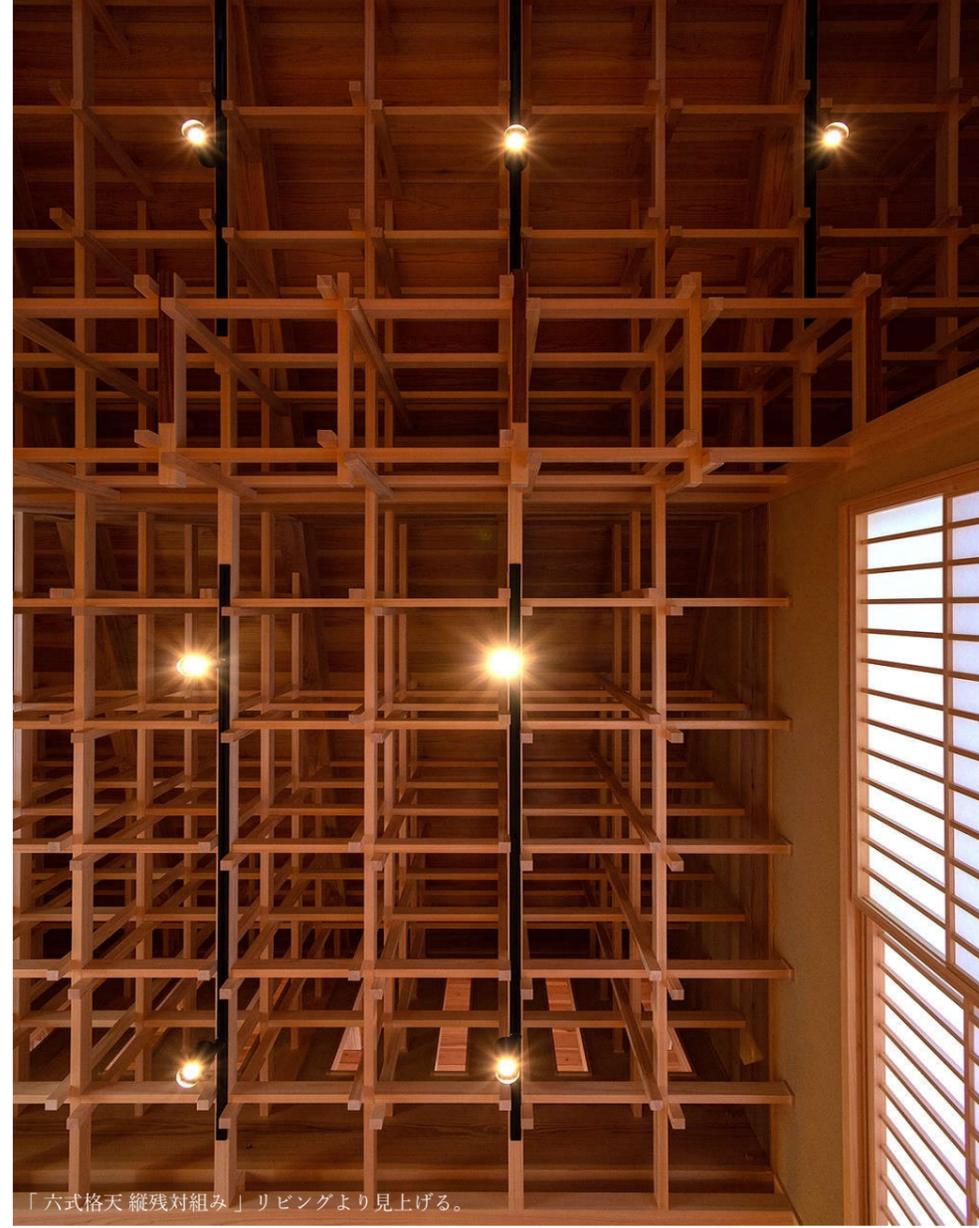
1,365mm出の深軒は、社寺の業の1つ「跳ね梁」を住宅建築で再現している。主屋との往来と、各々の生活の動線の軸となる。

屋根の下端に見えている垂木は、瓦の過重を全く受けない飾りの垂木であり社寺の地垂木・飛燕垂木と同様となる。
肝となる軒先廻りを支える跳ね梁の厚みの錯覚を生ませる軒揃いが緊張感のあるディテールを生んでいる。



玄関土間から見上げる。「胴差し 四式雇い臍栓打ち」など、魅せる構造美となる意匠。

構造設計事務所と大学での軸組破壊実験に協力し得たデータ、立会時の破壊のメカニズムの把握と継承している業と知識を加え、仕口形状と栓類の配置や数を算定し、独自の差し組を住宅へと可能にしている。



「六式格天 縦残対組み」リビングより見上げる。



玄関アプローチ、主屋と庭との調和による空間を作る。

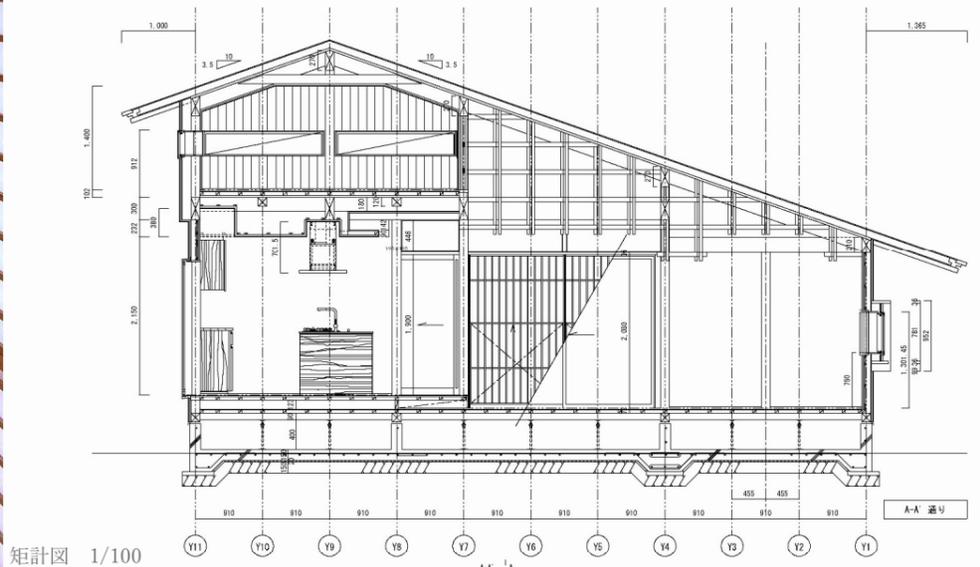


玄関土間、照明に荒土を付け自然の割れを作り、明りを溢す技法。

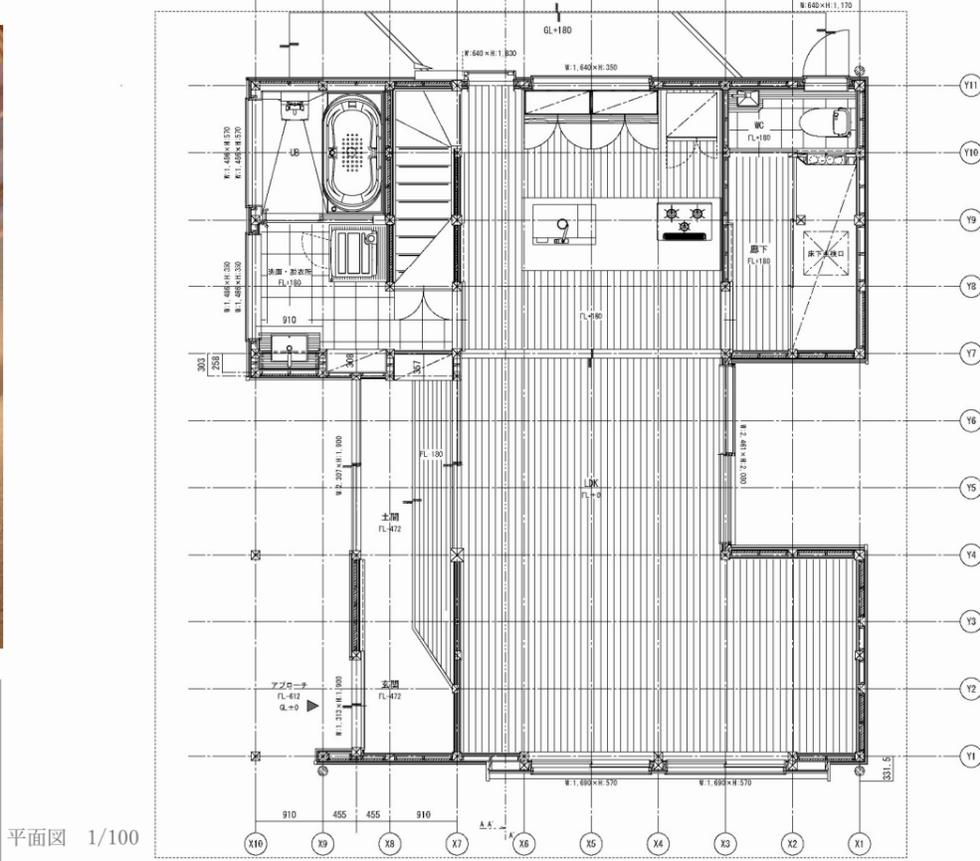
左官の伝統技法を基に独自の配合から造り出す左官塗りは、独自のパリエーションの意匠を内壁8mm塗り・外壁24mm塗りが表現を可能にする。
無垢材との組み合わせにより、室内では、調湿効果が高くは湿度の快適さを肌で感じる事が出来る。



建築主の意向による、寺院や書院造りなどに用いる格天組みをアレンジし、屋根勾配に合わせて六層で組み、縦残を組み足す。
下端に伸びる対角の2本の縦残は、十字方向で間仕切り壁を差し組む事を可能にし、十数年後の生活に合わせた可変的な部屋を可能にしている。



矩計図 1/100



平面図 1/100